

スタインウェイピアノのメンテナンス

1 ピアノ調律技術者の基本作業

「音の高さを調節して音階を作る」というのが、ピアノの場合には弦の張力を調整加減することによって、これらの弦が鳴らされた時に各弦が音楽の法則にかなった音階の正しい音を出すようにさせることです。

この「音階」は、正しい順序に並んだこれらの音の全体からなり、調律という仕事の目的は、ピアノが可能な限りの正確さでこれらの音を出すようにすることです。

2 整調

鍵盤を通してハンマーが打弦するまでの過程の中で、ピアノのすべてのアクションメカニック（打弦機構）を演奏機能上必要とされる状態に整える作業で、ピアノ製作の仕上げの時に理想とされた寸度に合わせていくことが基本です。

ピアノという楽器はバイオリンやフ

ルトなどと違って、音を出す過程がいれば体から遠いものであるために、演奏者の感情を楽器に伝えることが難しく、奏者の微妙な表現のニュアンスをアクションという機械装置を通じて伝えるほかに方法がありません。

優れたピアノのアクションは、演奏者の感情が肉体的なエネルギーとなった微細な指先の動きやペダリングを、いささかのロスもなくアクションメカニズムに正確に伝え、明確な音量や音色の違いとして表現することのできる演奏上の機能を備えていなければなりません。

言い換えれば、そのような機能が備わるようにアクションメカニックを調整することを、ピアノの整調と呼びます。

3 整音

主に、ハンマーフェルトの部分に施す技術作業を整音と呼んでいます。ピアノの持つ音色を一番直接的に変化させ最終的に決定させる仕事です。

しかし、ピアノの音色は調律や整調の仕事でも様々に変わるので、整音作業の前に調律と整調作業の精度を出来るだけ

可能な限り高いレベルで揃えておくことが必要です。

整音によってピアノの音に性格が与えられるので、その楽器の音色の特質が決定されるので、技術者にとっては、調律、整調その他すべての技術作業のバランスと統合性を判断する能力と経験、音感性が問われ、演奏者が意識し求める音が限りなくあるだけに、演奏者との対応も含めると非常に繊細、かつ精緻で鋭い感覚が要求される作業です。

二 ピアノのコンサート調律とピアノ技術者について

楽器の調律の基準音は、 $a_1 = 440\text{Hz}$ （ヘルツ）の国際基準音（ピッチ）に合わせて行いますが、ピアノの場合は、八長調の「ラ」の鍵盤の音がその高さにあたります。その基準音に従って、通常八八鍵、約二四〇本の弦を調節加減して、正しい音階を作ることがピアノの調律と呼ばれます。

しかし、ヨーロッパのオーケストラなどでは、より華やかな音の響きを出すために、少し高目のピッチ（442～445Hz）を採用し、ピアノ以外の各楽器もそのピッチに調整しています。現在、国内のオーケストラにおいては、NHK交響楽団を始め、殆どの楽団が442Hzのピッチを用いています。

バイオリンなどの弦楽器は、演奏者自らが調律（調弦）を行いますが、ピアノ

の場合、複雑な機構と数多くの弦を持つことや、その調律、調整に熟練した技術を要するために、専門の調律師がそれらの作業を行うこととなります。

しかし、演奏会にたずさわる調律師（コンサートチューナー）は、基本的な音の高さや調整を行うこと以外に、長時間の演奏にも狂いのこない音律の保持、リハーサル時と公演中の温湿度差による微妙な音の変化の判断と調整、演奏者の希望とそのホール内の音響を考慮しての舞台上のピアノ位置の決定など、経験と感性による総合作業が必要で



コンサートチューナーには、音感性、技術力、経験実績を通しての演奏者とのコミュニケーションが非常に大切であり、演奏者の求めに応じてピアノの演奏機能性と音を、そのピアノの持つ特性と可能性から最大限に引き出す能力が要求されます。

そのため、各メーカーともに、内外に活動するためのコンサートチューナーに対し、独自の基準を設け、厳しい判断で自社メーカーピアノのコンサートチューナー管理を行っています。何よりも、そのメーカーのピアノについての構造と、部材・製作の知識に精通し、適正管理のノウハウを理解し、行えることが、コンサートチューナーとして求められます。そして、そのメーカーの持つピアノの性能と機能を、最大限に引き出して演奏者に提供することが、コンサートチューナーに課せられた責務であり、そのピアノ本来の特性を変えてしまうことでは決してありません。それらピアノの性能と機能、そして特性を十分に引き出せたか否か、の違いが結果として技術力の差として表れます。

ピアノの管理面からは、国産メーカーにはその国産メーカーの、外国メーカーにはその外国メーカーの技術ノウハウを研鑽し熟知した技術者が調律を行うことが、上記観点からも望ましいと言えます。

さらに加えて言えば、万が一演奏現場で部品の小修理交換を要するような事態

が発生した場合にも（例えば、断弦張替えなど）、メーカー指定の技術者は、必要な純正交換部品を常備携帯しているために安全であることが挙げられます。

三 スタインウェイピアノ設置場所の温度・湿度

ピアノは主に木材、金属、鋳鉄、フェルト、クロス、皮革、樹脂等の部品で構成されています。これらの部品は、温度・湿度に対しての影響を受けて変化しやすく、様々な演奏機能性の調整を行うアクションメカニック（打弦機構）もこれらの部品で成り立っています。

アクションの調整バランスが変化し乱れてくると、演奏者の微細な鍵盤上やペダルのコントロールの違いを、明確な音量や音色の違いとしての確に表現することのできる演奏機能性が十分に維持できなくなります。

また、音律についても温度・湿度変化の大きさに比例して弦や鉄骨の膨張・収縮のバランスがくずれ変化していき、音を響かせる響板も音の振動伝達の早さや大きさが変わります。

さらに、それらすべてを支えるボディにも温度・湿度変化による膨張・収縮の負担が経年とともに蓄積されていきます。

これらの変化を最小限に防ぐには、スタインウェイピアノが設置されている場所の温度・湿度の環境管理をある程度一

定の条件に保つことが非常に大切です。

その適正条件の目安は、温度 24 ± 4 、湿度 $50\% \pm 5\%$ です。これは、ピアノに使用されている部材が、音響的、機械的に優れた性能を発揮するために必要な木材の平衡含水率注約10%を維持するための条件です。

（平衡含水率とは・・・木材中の水分の量が周辺の空気の温・湿度の影響に応じて変化した後、平衡状態に達したときの含水率）

四 スタインウェイピアノの保守点検について

スタインウェイピアノは主に、木材、金属、鋳鉄、フェルト、クロス、皮革、等の部品で構成されていますが、これらの部品は温・湿度変化に対して非常に影響を受けやすく、様々な演奏機能性の調整を行うアクションメカニック（打弦機構）もこれらの部品で成り立っています。

アクションの調整バランスが変化し乱れてくると、演奏者の微細な鍵盤上やペダルのコントロールの違いを、明確な音量や音色の違いとしての確に表現することのできる演奏機能性が維持できなくなってしまう。また、音律についても温・湿度変化の大きさに比例してバランスがくずれ、変化していきます。

これらの変化を最小限に防ぐには、ピアノを設置してある場所の温・湿度の

環境管理を一定の条件に保つことが非常に大切で、その適正条件は、温度 24 ± 4 、湿度 $50\% \pm 5\%$ が目安となります。

これらの数字は、特にスタインウェイピアノに使用されている木材が、音響的、機械的に優れた性能を発揮するために必要な含水率、約10%を維持するための条件です。

しかし、上記条件を年間を通して維持するためには、ピアノ設置場所の建築的な問題や設備の問題、経費的な問題等、さまざまな課題が出てきます。また、その維持が可能であっても厳密な意味での一定条件は、日本の国土が緯度的に南北に細長く、気温の地域差や夏と冬の温度差が大きいという気候の特徴を持っているために、非常に困難です。

また、温・湿度の変化の他にも、調整のバランスがくずれる原因があります。音律の変化については、ピアノの響板やボディにいつも弦の張力、約20数tの負担がかかっているという構造上の特色も大きな問題です。また、ピアノの使用率が高ければ、音律、アクションメカニックの調整の変化は、当然多くなります。

これらの状況下の中で、アクション（打弦機構）は、内的外的の環境による変化が蓄積し、ある一定の周期に基本的な調整作業を実施して修正しないと、奏者にとって演奏する為のコントロールが非常に困難な状態になってしまう恐れがあります。

通常調律においては、これらアクション調整も行いますが音律の調整を行うことが主要の作業となります。時間がある時は、上記アクションの変化調整作業を出来るだけ高い精度に仕上がるように行いますが、より精密な、しかも細部にわたる調整作業には、さらに集中した多くの時間が必要です。

その為に、アクションの調整は年に一度くらい、そのピアノの程度によって一日〜二日の時間をかけ、メーカーを出荷する時に理想とされた基本寸度に照らし合わせて調整し、また点検整備することが非常に大切です。

この点検整備作業がピアノの保守点検と呼ぶもので、作業内容は次の項目の通りです。

鍵盤調整・鍵盤の高さ調整・弦合わせ・ワイペン合わせ・打弦距離調整・ジャック前後の調整・ジャック上下の調整・ハンマー接近量の調整・鍵盤の深さの調整・ハンマードロップ量の調整・バックチェックの調整・レベティションスプリングの調整・ダンパー調整・ペダルの調整・調律・整音

また、年一度の保守点検を実施する利点として、下記の項目が挙げられます。

1 温・湿度変化、ピアノ使用度による変化等を、メーカーの基本寸度調整に修正することで、ピアノの持つ演奏機能上の性能を回復することがで

きる。

2 ピアノの各部分について、異状が発生していないか作業の中で点検ができる。

3 点検結果の状況をふまえて、より良い維持管理を行うためのアドバイスが受けられる。

ホールのピアノでは年一度、二日間の保守点検を実施する場合が最も多く、一般家庭にあってもこれらを実施することでピアノを精度良く使用しての長期維持効用が生まれます。

また、特に一般家庭ピアノでは上記保守点検を健康診断に見立てて一日に短縮した内容で行う「一日ピアノドッグ」と称した作業も行えます。

五 スタインウェイピアノの修理

スタインウェイピアノの長期使用によつてどの辺で修理や新規ピアノ交換等を考えればよいのかは各ピアノの使用状況（時間と内容）は様々ですので断定は出来ませんが、一般的に修理や新規交換等の見込みについての共通点を挙げる事が可能です。

最初に一般にいわれるピアノの寿命ということについて言えば大きく二つの考え方ができます。

1 ピアノとしての性能・機能がほとんど発揮されず、音がでなくなる、正確な音律の保持ができない、各部品等が損傷したり、組織が破壊している等の状況になる年数。
（構造的耐用年数）

2 ピアノとしての性能・機能が劣化しつつも、すべての音がでており楽曲の演奏に支障はないが、演奏者の求める音を出すための性能と機能が得られず、奏者やその音楽を聴く人達の多くが不満を持ち始める年数。
（質的な満足度を満たす耐用年数）

以上の内、ピアノという楽器の本質を考えると、2にあげる年数がピアノへの対処を考慮する場合にあたりと考えられます。

1 については、例えばピアノの使用状況や設置環境が良く、技術メンテナンス等が行き届いているときでも製造から50年〜70年位であるうかと思われれます。

1の年数については、(1)ピアノの設置環境の違い、(2)使用回数（時間的）と使用内容（質的）の違い、(3)調律調整などによつて様々に変わります。

はっきりと何年と断定することはできませんが、その判断基準の目安について弊社は主として下記の四項目を調べ、修理等のご進言としております。

ピアノ各部の消耗レベル

「弦とチューニングピン」

スタインウェイピアノの弦は、一本あたり約90Kgで引っ張られています。ピアノ一台の弦の総張力は、おおよそ20tに及びます。これらの張力の変化によつて音律の狂いも生じます。張力が変化する原因は様々ありますが、弦そのものが張力に反発して収縮しようとする力や演奏時にアクション（打弦機構）のフェルト製ハンマーによつて打弦される衝撃、また弦は響板上の駒と接触して響板の上から張られていますので、響板の温度・湿度の膨張収縮によつて張力が変化したり、ピアノ全体を支える支柱の温度・湿度の膨張収縮によつても変化します。



株式会社 松尾楽器商会
STEINWAY SALES

これらの事象が、演奏される時または保管中にかかわらず、ピアノの弦は常に休むことなく緊張した状態で一生を過ごす宿命となっており、次第に組織そのものに金属疲労が蓄積され、強度と音量、音の伸び、音色などが劣化していきま

す。個々の弦の打弦される衝撃は、楽曲の違いや演奏者の違いによってまちまちですので、時折劣化が進んだ弦が切れる場合もあります。

弦の金属疲労の現れかたは、ピアノの使用頻度によって違ってきますが、使用頻度が激しい場合、早いものでは五、八年、平均で十二、十五年、使用頻度が非常に少ない場合で他の管理状況が良好な状況で十五、二十年位と思います。

チューニングピンは、弦を巻き付けて保持している部分で、ピアノの調律時に技術者がこのピンを操作し、弦の張力の加減をして音律をあわせませます。このピンの疲労は、ある程度弦の疲労と比例して劣化し、弦交換時に一緒にパーツ交換をする場合の多い部分です。

「ダンパーフェルト」
ピアノの音を止める働きをするのがダンパーで、山型の木片にフェルトがつけられています。フェルトは弦の上に乗っており、鍵盤の動きに連動して、鍵盤を押し下げると弦から離れ、鍵盤を戻すと弦に接触して音を止めさせます。

雑音が生じたり、音を止める効果が劣化してきます。このフェルトの耐用満足年度数は十二、十八年位と想定できます。また、このパーツも弦交換時に同時に行うことが効果的です。

「ハンマーフェルト」
弦を打つハンマーは、木槌状の堅木に羊毛フェルトを固めて巻き付けたものです。強く張られた金属弦を打つため、使用頻度に応じてフェルトが少しずつ削られ消耗変形していきます。フェルトは内部ほど繊維の圧縮密度が高く、新品の状態の半分近く位までフェルトが消耗するとそれ以後は加速度的に消耗していくこととはありません。ただし、そのくらいまで消耗してしまうと、ピアノの音量や音色の変化がつけられず、刺激的な単一の音しか出なくなります。

この部分はパーツの交換によって劣化を改善することが可能ですが、修理交換等の目安としては、使用度と実際の消耗程度、音質劣化の状況を照らし合わせて判断します。使用頻度の非常に高い専門家などで五、八年、反対に頻度が低い場合で十五、二十年、平均では十二、十八年ほどです。

「鍵盤フッキングクロス」
鍵盤内部に貼ってある繊維クロスで、鍵盤が垂直に正確に動くためのガイドピンに接触し、雑音を防ぐ役目もしています。

「鍵盤フッキングクロス」
鍵盤内部に貼ってある繊維クロスで、鍵盤が垂直に正確に動くためのガイドピンに接触し、雑音を防ぐ役目もしています。

す。演奏者によって鍵盤はいつも動かさず、演奏者によって使用頻度によって他のパーツ部品よりも消耗が早い部分です。納入より十年前後位の目安で実際の消耗度を調べます。

以上の項目部分は、現地で行う部分修理の場合の代表的なパーツについて述べましたが、一項目のみや複合で行う場合もあります。

また、特に響板等の亀裂や他ボディー関係の本部等に問題が生じている場合、また外装塗装修理の場合は、工場等に持ち込んで修理をしなければなりません。外装は木部そのものの亀裂、剥がれ等がなければ、使用上による外傷が主ですので本来の音質にはあまり影響はないと考えますが、あまりに見苦しい状況である場合ご協議の上実施をお勧めしています。

上記具体的な項目で述べた部品は、交換可能な部分ですが、何度でも繰り返しできる訳ではありません。部分だけ取り上げれば消耗の度に交換可能と言えなくもありませんが、ピアノは各部品が密接に関係あつて構成されています。特に弦交換については始めに述べたとおり、約20tの張力がかかっていることでピアノボディーが常に緊張している状態ですが、修理のため弦をはずすと、ボディーはその緊張が解かれいったん弛緩します。そして再度弦を張られてふたたび緊張を強いられま

す。そのためボディーとともに他の支え部分の木部の組織へも緊張・弛緩で

大きな負担が蓄積され、その変化とともに劣化の進行も速まります。これが全体的な大修理の場合は、より多くの負担がかかります。

ピアノの構造面の消耗の宿命点を以上述べましたが、別面ピアノへ求める演奏者の要望や満足度については、演奏者個々においてそれぞれに違いがあると思われま

す。音質等について楽器に対する不満がでてくる場合は、設置環境、ピアノ技術メンテナンス、使用頻度と消耗程度を見直し点検して部分修理、全体修理、新規ピアノ交換等のご検討が必要であると考えま

す。なお、修理は行えばすべて新品同様になるものではありません。部分的な改善、全体的な改善と、修理の程度によって効果の現れかたは違いますが、どうしても交換できないピアノボディー本体部分の多くが製造からの継続年数を数えていきます。

前記に述べました修理による本体への負担のこともあり、ピアノ修理は次期新規ピアノ交換までの間の継続のため、また新規ピアノを購入した上で二台目のサブピアノとして活用していくため、劣化した部分の改善を望む手段として考えていただくことが大切です。

六 中古のスタインウェイピアノ

スタインウェイピアノの修理に関連して、特に年数の古い中古ピアノについて興味があり、また購入を検討している方々のために中古スタインウェイピアノを選ぶ際の手がかりとして頂くためにご案内いたします。

一般に中古スタインウェイピアノを求める理由として、1 価格が安い。2 昔のスタインウェイの方が、新品よりも良い材料で作ってある。3 長年使用されたスタインウェイは音の響きが新品より良い。などの理由が最も多いと思われる。これらは中古ピアノのメリットとされてきていることですが、反面デメリットを負うことになって購入後ご相談される場合もあることから、ここではそれらのメリット、デメリットをあげて判断の材料にさせていただけるように致します。

1 価格が安い。

この評価は個別の考え方で違ってきますが、中古スタインウェイピアノは一般的に新品の同機種に比べると低価格で販売している場合が多いと思います。中には特別な付加価値があつて新品以上の価格がするものもあります。この価格の高額低額を判断するためには、表示価格の比較ではなくある程度条件を考えて客観的に実質価格を判断する方法をお勧めいたします。それは、購入後に何年使用可

能か予測する「ことです。

特に一度も修理をしていないかなり古いピアノは、それまでの使用歴や設置環境の影響、技術面メンテナンスのあり方によって購入時の品質（性能・音響等と演奏機能性・鍵盤アクションの操作性等）がいつまで維持するのかを予測する必要があります。例えば十年間その品質で使用できるか、二十年間使用できるかでは維持経費は二倍違ってきます。数年後に各部消耗部品がさらに消耗し修理が発生する場合は、その時点で修理費が加算されますので長期的な使用想定から価格を判断しなければ本当に安いのか、あるいは高いのかが判断できません。修理をした場合、購入時点での音質がどのくらい変わるのかも考慮しなければいけません。

すでに修理がしてある場合には次の点を確認します。修理箇所の確認（この確認によって以前の使用年数に対してのピアノのダメージが想像できます。）、パーツ交換の場合は純正品かどうかの確認、修理を実施した業者あるいは技術者の修理保証が付いているかどうか、などです。スタインウェイピアノの新品は正規特約店からの購入の際、購入後製造に関して異状が認められた場合、五年間の無償修理保証が付いています。中古ピアノの場合は勿論新品よりも少ない期間ですが良心的な店は保証をつける場合が多いので契約時には確認をすることが大切です。

通常、交換パーツを純正品にて修理をするのが適正ですが、場合によって利益

のためではなく技術的観点からあえて純正品を使用しないで行う修理もありま

す。この場合、その修理に技術的な自負があれば、こういう理由で純正品を使用していないと明言するはずですので、あとは演奏判断で購入者が納得すれば、それはそれで意味のある中古ピアノ購入と言えると思います。注意をしなければいけないのは、利益をあげるために安い粗悪な部品を使用して修理してあるピアノです。しかし、それらの判断に一番困るのは純正品を使用しているという見分け方が、それらパーツに精通していないとなかなか出来ないということです。判断に迷い、さらに純正品使用を望むときは購入時の契約書にそのことを明記してもらうことです。購入後問題が生じたときに役に立ちます。また、中古スタインウェイピアノの年数を調べる場合、鉄骨上に記載してある製造番号から製造年を知ることが出来ますので、判断できない場合はお問い合わせ下さい。

単純な例を挙げますと、ピアノが新品の半額で販売している場合、そのピアノがその後修理をせずに新品の半分以上の年数が使用可能と予測できること。そしてそのピアノを試弾して楽器の品質を現時点から予測した使用年数まで維持できると納得した場合は、本当に安い中古ピアノということが出来ます。

2 昔のスタインウェイの方が、新品よりも良い材料で作ってある。

このことは、もう一つ造り方も昔の方が丁寧な造りであるということも言う方もいらつしやいます。これは時代的な状況で寸分違わず昔と今が同じだとは確かに申せません。ただし、スタインウェイでは部材の変更や製造法について、すでに一八五三年の創業以来ほぼ今から一〇〇年前の一九〇〇年前半に現在のモデルが完成され、その後モデルチェンジや新製品等はなく大きな変更はありません。一部パーツの製造にコンピューターを導入して、各パーツの寸度精度を高めたことなどが挙げられますが、その間に最も変化したことは現在世界的に問題にされている環境問題です。

この半世紀の人類の進歩はそれまでの時代と比較しようもなく加速度的に変化しています。地球環境問題も様々な公害問題も特に近年目立っておきてまいりました。ピアノに使用される多くは木材であり、羊毛であり、鹿皮でありと自然の有機的部材です。勿論鉄骨や弦等の金属、樹脂等の部材もあります。しかし、音響に直接係わる部分の木材は環境変化で地質が変われば育成する木材そのものに影響を及ぼします。また、羊や鹿などの生物の食する植物も地質や酸性雨等の影響を受けるのが必然です。当然、環境が違つた時代のもと同じ部材は入手が困難な時代になってきています。その中で

も、部材と製造法の本質を現在も維持しているのがスタインウェイピアノです。スタインウェイもそれら部材のクオリティを最も大切に、それらを補うために現代のテクノロジーを採用しています。あくまでもスタインウェイが意識して部材を変え、製造法を変えることはありませぬ。

う言葉になって現れ、それらの話が巷に広がっていく現象ともなっているようです。どのような意見も参考にすることは有意義ですが、最終的に自分の聴覚、触覚、視覚を駆使してその総合的な感性でピアノという楽器を判断して下さい。

3 長年使用されたスタインウェイは音の響きが新品より良い。

新品と違うことは事実です。楽器は育てるものですから、使用状況によってより優れた楽器に変わっていくことが多くあります。逆にそうでない場合もありま

す。使用されてきたピアノが良い意味で熟成されていけば新品では出ない趣と音色がピアノから醸し出されます。それはその熟成度が良いのか悪いのかの判断ではなく、好きか嫌いなのかの判断

と思います。中古ピアノはその使用歴からある決まった音色感を持つ楽器であると言えます。これは修理をしてあるピアノでも、響板、ボディを変えていなければそれら使用歴の音は着実に楽器の中に蓄積されますので同様に判断しても良いと思います。

反対に新品は生まれたばかりといえますので、購入後にその楽器を育成していくこととなります。美しく育つか、否かはその使用状況で、また設置環境で、あ

るいは技術メンテナンスで決まってきたり、これからそれらの可能性を楽しむのが新品であるとすれば、中古ピアノはすでにある程度できあがった楽器と言ったことが出来ます。それが気に入るかどうかは購入する方の判断です。

新品のピアノは自分の手で音を熟成させる楽しみがある反面、どのように変化していくかは確定していない要素があります。中古ピアノはすでに育てられ、できあがった音を確認できる良さがある反面、その音をさらに育成するのは困難であることがあげられます。

以上、中古スタインウェイピアノについて述べましたが、中古ピアノの購入を實際考えた時は、やはり購入して良かったと納得していただきたいことが望まれます。試奏して納得するためには、現在の新品ピアノも同時に試弾して比べて見て下さい。新品の現在の音色と可能性、中古ピアノの熟成された音色の判断と今後の可能性を判断するためです。

価格については、どちらの場合も表示価格にとらわれず、実質価格を知るために購入後の満足使用年数を予測して、表示価格をその年数で割り、さらに三六五(日)の数字で価格を割ってみて下さい。それぞれのピアノについて一日の減価償却の維持価格が算出できます。そしてどちらの場合も、技術的な要素つまり日常の調律、今後の修理時のパーツの問題、修理技術の問題やその他のサービス、保

証なども契約書の内容もさることながら、事前に確認することが重要です。新品ピアノでは出せない中古ピアノの音響、新品でなければ出ないピアノの音の中で自分の求めるピアノという楽器に備わっていて欲しい音と演奏機能性(タッチ感)を長期的に使用できるかを含めて探当てて欲しいと思います。それらの総合判断で各人にふさわしいスタインウェイピアノをご検討下さい。

(武内順一)

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

松尾楽器商会

